Ensemble 14

アンサンブル・フィアツェン

第1回演奏会

1999年9月18日（土）19:00開演　ルーテル市ヶ谷センター

後援　JCDA 日本合唱指揮者協会

指揮	辻秀幸	
声楽	Ensemble 14	
管弦楽	La Strada	
	蒲生克郷	（第1ヴァイオリン）
	大谷美佐子	（第2ヴァイオリン）
	長谷川敦子	（ヴィオラ／ヴィオラ・ダ・ガンバ）
	西澤央子	（チェロ／ヴィオラ・ダ・ガンバ）
	江崎浩司	（ファゴット／リコーダ）
	古橋潤一	（リコーダ）
	能登伊津子	（オルガン）

作曲　ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

Johann Sebastian Bach（1685～1750）

カンタータ150番「主よ、われ汝をあおぎ望む」

Kantate Nr.150 "Nach dir, Herr, verlanget mich" BWV 150

Soprano 室橋明美(3)、武元玲子(7)、Alto 富岡愛子、Tenor 小林尚弘、Bass 武内崇史

カンタータ155番「わが神よ、いつまで、ああいつまでか」

Kantate Nr.155 "Mein Gott, wie lang, ach lange" BWV 155

Soprano 川村昌子(1)、室橋明美(4)、Alto 中神康一、Tenor 内藤秀司、Bass 林秀博

～休憩（Pause）～

カンタータ106番「神の時こそいと良き時」

Kantate Nr.106 "Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit" BWV 106

Soprano 鈴木幸穂、Alto 大石明子、Tenor 小泉孝博、Bass 大石峰士(2)、武内崇史(3)

ごあいさつ

辻秀幸

今日の合唱団ができるきっかけを下さったのは神様だったんです。

何をほざきやがる!なんておっしゃらないで下さい。本当のことなのですから....。あれは今から五年前の事。日本キリスト教団の奥沢教会から、毎年行われるクリスマスのメサイアの演奏の指揮を私が依頼されたことから始まります。個人的な拘わりはもっと前から有るのですが、話が大変ややこしくなりますので、溯るのはこの辺までにしておきましょう。

メサイアの演奏も二年ばかり終えたころでしょうか、メサイアを歌っていたメンバーが、マタイも（何と気楽な訴えであったことか...）歌って見たいんですがというご要望にお応えして、「マタイを歌う会」成るものが誕生しました。月に一回だけと言うスローペースの歩みでは有りましたが、今年のイースター前の金曜日に、念願かなって牧師先生の聖書朗読を柱に据えたマタイ受難曲を、抜粋ながら演奏することが出来ました。

この時に、第二コーラスとして急遽組織された合唱団が、本日の主役"アンサンブル14"です（良かった!やっと出てきた..）。彼らはれっきとしたアマチュア集団で、普段は図書館・銀行・キャバレーの呼び込み等など（?）様々な職業についている訳ですが、土曜日の午前中または午後に、自由が丘付近に集まって練習しています。奥沢メサイアの合唱団が超アナログ集団で有ったのに対し、このアンサンブル14は、Eメールアドレス所持率100%のデジタル集団です。団のお知らせも交互の連絡も私の悪口も（たまに誤って私のメールにも送られてくるのです）彼らはメールでやり取りをします。器用に文明の利器を使いこなす彼らの前であっても、しかし我らの愛する音楽の父バッハは偉大でありました。何度やっても出来ない、歌えない、音がはまらない.... 今日もそのままですが、それでも貴重な休日を、彼らは惜しげもなくバッハに捧げて来ました。私も大学時代に小林道夫先生からバッハの手ほどきを受けてからというもの、バッハを愛し、歌える機会は条件を問わずに歌ってきたつもりです。

こう見えても合唱指揮者歴20年を数える私が、今日初めてカンタータを指揮します。正確には学生時代の芸術祭でカンタータ140番の冒頭の合唱曲を、部長（芸大バッハカンタータクラブ）であると言う理由だけで振らされた事は有るのですが、それ以来、21年ぶりの大事件です。21年前と同じ条件がただひとつ。心から敬愛して止まないヴァイオリンの蒲生先輩がおられることです。バッハがいたからこそ、こんな自分でもお付き合いを許されている一流の音楽家の皆さんがたくさんおられます。今日のラ・ストラーダ（"道"の意）のメンバーの充実ぶりをそのサウンドを通してお楽しみ下さい。アンサンブル14のメンバーはこんな方々と共演出来る喜びを通して、益々バッハにはまって行って下さい。来年4月にはマタイ受難曲の本公演も控えています。これからも皆さんと善い時を持ち続けて行きたいものです。

本日ご来場の皆様の中で、バッハを愛し、最低でもメールの受信だけは出来る方! 練習に遊びにいらっしゃいませんか? 平成の歌うダヴィデ像こと私が、こころより歓迎申し上げます。尚、アナログ系の方は奥沢教会にお問い合わせ下さい!

カンタータ150番「主よ、われ汝をあおぎ望む」

Kantate Nr.150 "Nach dir, Herr, verlanget mich" BWV 150

人間だれでも若い日はあるものだ。音楽の父バッハも、今でこそ肖像画の中で厳めしく鎮座しているが、伝記などを読むと、20歳前後は多難で奔放で多感な時期を過ごしていたようだ。

まず、仕事は聖歌隊との人間関係に不和があったり、休暇を無断延長したりで順調でなかったし、ブクステフーデの影響を受けた半音進行と不協和音の音楽は、アルンシュタットの人々の耳には新しすぎた。そしてミュールハウゼンへの転職と転地、初めての結婚と、人生の転機を迎える。

カンタータ第150番は、このような時期に書かれた。バッハがミュールハウゼンに移ってからの作品（1708年または1710年、バッハ22～23歳）というのが通説だが、これよりもっと以前にバッヘルベルへのオマージュとしてアルンシュタット時代に書かれたとの説もある。バッハの最初期の（ひょっとすると現存する最古の）カンタータである。

第一曲は器楽のみのシンフォニアで、半音進行の旋律がほの暗く流れる。世界の受難はこのように暗く表現されている。

第二曲は前半でシンフォニアの旋律を合唱が引き継ぎ、続くフーガで「私の信仰の敵が私に勝ち誇らないでください」と神に願う。

第三曲はバイオリンの伴奏を伴うソプラノのアリア。「いかなる試練が襲うとも私は満ち足りている、真実なるものは変わらず真実である」。アリア中半のソプラノと伴奏の掛け合いは簡潔ながらもとても印象的である。

第四曲の前半，「私を導いてください」の言葉が４パートに渡り上昇していく。曲は全音音階となり、これまでの半音進行と対比的に、神への信仰の道を陳べる。

第五曲。嵐の中に立つ杉の喩えを通して、正しい言葉と行いを神に求めるよう諭す歌。通奏低音の奏でる嵐の上に教えの言葉が対比的にレガートで流れる。

第六曲。第二、第四曲と同様、前奏曲とフーガの構成。終末部のリズムの変化が新鮮な曲。

終曲。信仰の拠り所と神の加護を確認した喜びを歌う。何度も繰り返される4小節毎の繰り返しが、その確かさを示す。信仰の敵との戦いは今後も続くのであろう。合唱の終止の和音は解決しきらず継続的な感じを残す。後年、ブラームスが第４交響曲の終楽章にこの曲の主題を援用している。

全曲を通して聴くと、身辺の困難や環境の変化の中で信仰に拠り所を求める若いバッハの姿が浮かぶような気がする。音楽も歌詞も瑞々しい。それがこの曲の一番の魅力と思う。　（林秀博）

歌詞対訳

1
（シンフォニア）

2
（合唱）

Nach dir, Herr, verlanget mich.	主よ、私はあなたを求める。
Mein Gott, ich hoffe auf dich.	私の神よ、私はあなたを望む。
Laß mich nicht zu Schanden werden,	私を恥辱にさらさないで下さい
daß sich meine Feinde nicht freuen über mich.	私の敵が私のことで喜ばないように。

3
（アリア／ソプラノ）

Doch bin und bleibe ich vergnügt,	しかし私は楽しんでいるし楽しみ続ける
obgleich hier zeitlich Toben,	ここはときどき荒れ狂うにも関わらず
Kreuz, Sturm und andre Proben,	十字架、嵐や他の試練
Tod Höll' und was sich fügt.	死や地獄とそれらを形成するものが。

Ob Unfall schlägt den treuen Knecht,
Recht ist und bleibet ewig recht.

災いが忠実な下僕を打つことがあっても
正しいことは今もこれからも永遠に正しい。

4
（合唱）
Leite mich,in deiner Wahrheit,
und lehre mich,
denn du bist der Gott, der mir hilft,
täglich harre ich dein.

私を導いて下さい、あなたの真実に
そして私に教えて下さい
あなたは私を救う神だから
毎日私はあなたを待ち受ける。

5
（合唱）
Cedern müssen von den Winden
oft viel Ungemach empfinden,
oftmals werden sie verkehrt.

杉は風の中で
しばしば多くの不幸に遭い
ときには倒される。

Rat und Tat auf Gott gestellet,
achtet nicht was widerbellet,
denn sein Wort ganz anders lehrt.

忠告と行いを神に求める者は
こざかしい敵に注意を払うことはない
神の言葉は全く違ったことを教えているから。

6
（合唱）
Meine Augen sehen stets zu dem Herrn,
denn er wird meinen Fuß aus dem Netze ziehen,

私の目はいつまでも主を見つめる
彼は私の足を網から引き出してくれるから。

7
（合唱）
Meine Tage in den Leiden
endet Gott dennoch zu Freuden,

私の日々は 苦しみの中に
神はそれを終わらせたばかりか、喜びに変えた。

（ソプラノ／アルト／テノール／バス）
Christen auf den Dornenwegen
führen Himmels Kraft und Segen,
bleibet Gott mein treuer Schatz,
achte ich nicht Menschenkreuz.

茨の道にあるキリスト教徒たちを
天の力と恵みが導く。
神は私のもとにとどまり、私に誠実な宝である
私は人の十字架を尊敬しない。

（合唱）
Christus, der uns steht zur Seiten,
hilft mir täglich sieghaft streiten,

私たちのそばにいるキリストは
私を日々助け、勝利のために闘う。

（対訳　中神康一）

カンタータ155番「わが神よ、いつまで、ああいつまでか」

Kantate Nr.155 "Mein Gott, wie lang, ach lange" BWV 155

バッハが多くのオルガン用コラールを作曲した、ヴァイマール時代初期の作品。顕現節後の第2日曜日の為に書かれた曲であり、4つのソロと1つのコラールとから成っている。

1. レシタティーヴォ（ソプラノ）　曲名どおり、ソプラノが切々と苦難の中、信仰の灯を見出せず行き場を失う不安を歌ってゆく。通奏低音の8分音符の刻みも無常感が漂う。後半、Freuden Wein（喜びの酒）の華やかな音型は、最後のSinkt（沈む）の下降音型と対比となり、Sinktはさらに痛切に響く。

2. デュエット（アルト・テノール）　ソプラノが信仰の不安を訴えたのを受けて、アルト・テノールは「信じなさい、望みなさい、神に委ねるのです」と交互に歌いかける。中間部、テノールが確信に満ちて

「イエス様は正しいときをご存知です」と歌い始めると、フーガ風にアルトが追って、美しい綾を作り出す。そして、冒頭に戻り、「信じなさい、〜」と再度繰り返す。曲中を通じて、ファゴット・チェロが信仰の支えのように奏でられる。

3. レシタティーヴォ（バス）　先のデュエットで神への信仰が説かれたが、ここもバスが雄弁に「魂よ、満足せよ」と説く。時折現れる通奏低音の激しい動きは、朗誦に対しドラマを与える効果的な動機となっている。

4. アリア（ソプラノ）　全3曲とは打って変わって、軽やかさを持った付点のリズムで、苦悩から開放され、神のみ腕に魂を委ねる喜びを歌う。歌冒頭のF音でWirf!（投げよ!）と歌い出されるように、言葉と曲が見事な調和を見せている。

5. コラール（合唱）　4曲のソロを通じて歌われた、神への信仰を再度コラールとして歌い上げる。パウル・シュペラートゥス作のコラールの転用。

（大石明子）

歌詞対訳

1

（レシタティーヴォ／ソプラノ）

Mein Gott, wie lang, ach lange?	私の神よ、どんなにか長く、ああ長く。
Des Jammers ist zuviel,	悲嘆は多過ぎ
ich sehe gar kein Ziel	私は行き先が全く見えない
der Schmerzen und der Sorgen.	痛みと不安のために。
Dein süßer Gnadenblick	あなたの甘くて慈悲深いまなざしは
hat unter Nacht und Wolken sich verborgen,	夜と雲の中に隠れてしまった
die Liebeshand zieht sich, ach, ganz zurück.	愛する手は、ああ、全くいなくなった。
Um Trost ist mir sehr bange.	慰めは私にとって大きな不安となった。
Ich finde, was mich Armen täglich kränket,	私は私を日々苦しめるものを見つけた
der Tränen Maß wird stets voll eingeschenket,	涙の器はいつまでも注ぎ続け
der Freuden Wein gebricht;	喜びのワインはこぼれ
mir sinkt fast alle Zuversicht.	私の確信はほとんど全て沈んだ。

2

（二重唱／アルト・テノール）

Du mußt glauben,	あなたは信じなければならない
du mußt hoffen,	あなたは望まなければならない
du mußt Gott gelassen sein;	あなたは神に委ねなければならない。
Jesus weiß die rechten Stunden,	イエスは正しい時を知っている
dich mit Hilfe zu erfreun.	あなたを喜ばせるために手助けする時を。
Wenn die trübe Zeit verschwunden,	つらい時が過ぎ去ったとき
steht sein ganzes Herz dir offen.	彼の心は全てをあなたに開いている。

3

（レシタティーヴォ／バス）

So sei, o Seele, sei zufrieden!	そのようにありなさい、おお魂よ、満足しなさい。
Wenn es vor deinen Augen scheint,	お前の目にとって
als ob dein liebster Freund	まるでお前の最も愛する友が
sich ganz von dir geschieden,	お前から完全に別れてしまうように思われるとき
wenn er dich kurze Zeit verläßt, Herz!	彼がお前から短い時間去るように思えるとき、心よ!
glaube fest,	堅く信じなさい
es wird ein kleines sein,	それが少しの間であることを
da er für bittre Zähren	彼は苦い涙の代わりに
dir Trost und Freudenwein	お前に慰めと、喜びのワインを
und Honigseim für Wermut will gewähren.	そしてにがよもぎの替わりに蜂蜜を与えるから。

Ach, denke nicht,	ああ、考えるな
daß er von Herzen dich betrübe;	彼が心からお前を悲しませようとしているとは。
er prüfet nur durch Leiden deine Liebe,	彼は苦しみを通して、 お前の愛をただ試しているだけなのだから
er machet, daß dein Herz bei trüben Stunden weine,	彼は濁った時間によってお前の心を泣かせる
damit sein Gnadenlicht dir desto lieblicher erscheine;	それによって彼の恵みの光は それだけ一層好ましくお前に現れる。
er hat, was dich ergötzt,	彼はお前を楽しませるために
zu letzt zu deinem Trost dir vorbehalten;	お前の慰めを最後に取っておく。
drum laß ihn nur, o Herz,	それゆえただ彼がするに任せなさい、おお心よ
in allem walten!	全てを統治することを。

4

（アリア／ソプラノ）

Wirf, mein Herze,	投げよ、私の心よ
wirf dich noch in des Höchsten Liebesarme,	お前を最高の愛する腕へ
daß er deiner sich erbarme!	そうすることで彼がお前を憐れむように。
Lege deiner Sorgen Joch	お前の心配のくびきを置け
und was dich bisher beladen,	そしてお前が今まで抱いてきたものも
auf die Achseln seiner Gnaden!	彼の恵みの肩の上に。

5

（コラール）

Ob sich's anließ, als wollt' er nicht,	彼が懲らしめようとしたり、そうしないときでも
laß dich es nicht erschrekken,	あなたはそれを怖れてはいけない
denn wo er ist am besten mit,	というのは彼がいる場所が最良であるが、
da will er's nicht entdekken;	そこに彼を見つけることはできないからである。
sein Wort laß dir gewisser sein,	彼の言葉はあなたにとって確かなものとなる
und ob dein Herz spräch lauter Nein,	だからあなたの心が大声で否と叫んだとしても
so laß doch dir nicht grauen.	あなたは怖れてはいけない。

（対訳　中神康一）

カンタータ106番「神の時こそいと良き時」

Kantate Nr.106 "Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit" BWV 106

カンタータ106番はJ.S.バッハの初期作品のひとつでミュールハウゼン時代に書かれた。作品の用途は定かではないが、葬儀用と考えられる。バッハのカンタータの中でも最も演奏機会の多い有名な曲であるが、106番を初めて聴く人は第1曲のヴィオラ・ダ・ガンバとリコーダの音色に接してバッハに対する見方が変わるのではなかろうか。第2曲では誰にでも訪れる「死」が重々しく表現されている。その死は神が決める最良の時に訪れるという内容がこのカンタータの骨格を与えている。第3曲では死への救済が歌われる。バスのソロはイエスの十字架上の言葉の再現である。第4曲では二重フーガで華々しく三位一体である神と子と聖霊が讃えられる。このカンタータの中の明るいフレーズを聴くと、このカンタータのテーマが死であることを忘れそうになる。しかし、それは死と対比される生の部分であったり、神の意志を肯定するものであったり、とバッハがテキストを忠実に音楽に表現している現れなのである。（中神康一）

歌詞対訳

1
（ソナティーナ）

2
（合唱）

Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit.	神の時は最良の時である。
In ihm leben, weben und sind wir,	彼によって私たちは活動し、存在する
solange er will.	彼が望むだけ長く。
In ihm sterben wir zur rechten Zeit,	彼によって私たちは正しいときに死ぬ
wenn er will.	彼が望む時に。

（アリオーソ／テノール）

Ach, Herr, lehre uns bedenken,	ああ主よ教えて下さい、熟慮する私たちに
daß wir sterben müssen	私たちが死なねばならないということを
auf daß wir klug werden.	教えにより私たちは賢くなれます。

（アリオーソ／バス）

Bestelle dein Haus,	あなたの家を注文しなさい
denn du wirst sterben	あなたは死ぬのだから
und nicht lebendig bleiben,	そして生き続けることができないのだから。

（合唱）

Es ist der alte Bund:	それは古くからの契約である
Mensch, du mußt sterben!	人よ、お前は死なねばならない。

（アリオーソ／ソプラノ）

Ja, komm, Herr Jesu!	そうです、来て下さい、主イエスよ。

3
（アリア／アルト）

In deine Hände	あなたの手の中で
befehl ich meinen Geist,	私は私の霊に命ずる。
du hast mich erlöset,	あなたは私を救った
Herr, du getreuer Gott.	主よ、あなたは誠実な神です。

（アリオーソ／バス）

Heute wirst du mit mir,	今日あなたは私とともにいることになる
im Paradies sein.	天国にて。

（コラール）

Mit Fried und Freud ich fahr dahin,	和合と喜びとともに私はそこへ進む
in Gottes Willen,	神の意志のもとに。
getrost ist mir mein Herz und Sinn,	私の心と意識は平然としている
sanft und stille,	穏やかに、そして静かに。
wie Gott mir verheißenhat,	神が私に約束したことは
Der Tod ist mein Schlaf worden.	死が私の眠りになるということ。

4
（合唱）

Glorie, Lob, Ehr und Herrlichkeit,	栄光、賞賛、名誉と栄華は
sei dir,	あなたにある
Gott Vater und Sohn bereit,	神である父と（私たちに）与えられたその息子
dem Heilgen Geist mit Namen!	御名とともにある聖霊よ。
Die göttlich Kraft macht uns sieghaft,	神の力は私たちに勝利をもたらす
durch Jesum Christum, amen.	イエスキリスト（の御名）を通して、アーメン。

（対訳　中神康一）

辻秀幸（つじ　ひでゆき）
1981年東京芸術大学声楽科卒業。1984年同大学院独唱科修了。渡邊高之助、関種子、下野昇、水谷ひさ子の各氏に声楽を、小林道夫、佐々木正利の各氏に宗教音楽を学ぶ。1985年ミラノ市に留学。L.グゥアリーニ女史に師事し、ドイツ・リート、宗教音楽を学ぶ。国内では宗教曲のソリストとして活躍するほか、オペラにも多数出演している。最近はアマチュアコーラスの指揮、発声指導も多く手掛けている。日本合唱指揮者協会理事。洗足学園音楽高校非常勤講師。共著に「わかって歌おう ー レクイエム発音講座」がある。

Ensemble 14（アンサンブル・フィアツェン）
辻秀幸先生の呼びかけにより、J.S.バッハのマタイ受難曲を歌う目的で1998年8月に発足したアマチュア合唱団。1999年4月奥沢教会（世田谷区）にて「マタイを歌う会」とともにマタイ受難曲の抜粋演奏（ピアノ伴奏）に参加。2000年4月1日（土）には「マタイを歌う会」とマタイ受難曲の全曲演奏（オーケストラ伴奏）を予定。14はバッハ自身も用いたと言われるBachを表す数字で、B=2、A=1、C=3、H=8を足し合わせたもの。今のところメンバーにキャバレーの呼び込みはいません。

Ensemble 14　メンバー

指揮者	辻秀幸				
練習ピアニスト	田城章子				
ソプラノ	大久保淳子	（尾崎陽子）	川村昌子	小林総子	鈴木幸穂
	武元玲子	（田中百合子）	（難波愛）	室橋明美	山崎晃子
アルト	大石明子	富岡愛子	中神康一		
テノール	小泉孝博	小林尚弘	内藤秀司	（中原浩一）	山田陽史
バス	大石峰士	（佐藤紀之）	武内崇史	林秀博	

代表	中神康一
副代表	大石明子（技術）　武内崇史（会計）
演奏会運営	山田陽史　林秀博
演奏会会計	武元玲子

Ensemble 14　団員募集のお知らせ

アンサンブル・フィアツェンでは一緒に歌って下さる方を募集しております。次の目標は2000年4月1日（土）マタイ受難曲全曲演奏を予定しています。バッハが大好きな方はもちろん、バッハが初めての方もアナログ系の方も歓迎です。ぜひ一度私どもの練習をご覧になって下さい。

指導	辻秀幸先生
練習日	毎週土曜日（10:00～12:00または13:00～17:00）
練習場所	自由が丘（東急東横線・大井町線）、武蔵小杉（東急東横線）など
お問い合わせ	武内　Phone　042-993-6889
	室橋　E-mail　YRM01040@nifty.ne.jp